

「字合」年齢考

大野保

玉藻刈る 沖方は榜がじ 敷妙の 枕のあたり 忘れかねつ
も

萬葉集卷一「大行天皇難波の宮に幸する時の歌」三首中の一首
(七二)で、左註に

右一首式部卿藤原宇合

とある歌だが、作者宇合の行年に諸説があるため、作歌当時の宇合の年齢が問題にされているものである。懷風藻では宇合の行年は三十四になつてゐるけれども、続日本紀によると、宇合は天平九年(七三七)八月五日に薨じてゐるから、それから逆算すると、慶雲三年(七〇六)の作歌當時にはわずかに三歳ということになつて、これは到底信じられない。しかも、この三十四というのは、懷風藻の中でも紀州家本・前田本と刊本(天和・宝永・寛政)にだけあるもので、その他の諸本、すなわち林家本・飯田本(飯田瑞穂氏蔵)には「四十四」尾州家本・脇坂本・来歴志本・陽春廬本・群書類従本・島原本・天理本・渋江本・彰考館本には「卅四」など、管見のおよぶところすべてそうであるところを見ると、三

十四歳説はなおさら信じられない。三十四とあるのも、恐らく「卅四」の「卅」を「卅」に見ちがえたところから生じた謬伝であらうと思われる。が、それにしても「卅四」でも作歌當時の年齢は十三歳だから不適當なことにはかわりがない。富士谷御杖の萬葉燈に眞淵の萬葉考を引いて

眞淵は、この比はこの卿いまだ童にておはしし時なれば、從駕し給ふべからず、宇合卿の歌にはあらじと。たとひ童にて從駕し給ひしにもあれ、この歌妹を思へる心なれば、童にはふさはしからず、伝へあやまりたるなるべし。

といい、岸本由豆流の萬葉集攷證にも

懷風藻公卿補任などみな薨年四十四とあれば、持統天皇八年の誕生也。されば、この慶雲三四年のころはいまだ十三四にておはしたれば、御幸の御ともにてかかる歌などよまれん事おぼつかなし。よく可考。

といつてゐるのは、いずれもこの点に疑念をいだかれたのである。現代の註釈書でも、美夫君志・講義・精考・私注・全註釈など、

大体同じようなことを述べている。

なおこれらとは別に契沖の五十四歳説がある。代匠記精撰本に懷風藻に此の人の詩を載せ、題下に記して云はく、年五十四。聖武紀を考ふるに天平九年に薨ぜらる。引き合せて逆推すれば天武十三年に生る。此の行幸、慶雲の比ならば廿餘歳なるべし。

とあるのがそれである。古義も代匠記と同じだが、これについては澤瀉久孝博士の注釈がもつともくわしいから、長いけれどもつぎに引用する。

年卅四では遣唐副使が十三歳になつて問題にならず、四十四としても慶雲三年が十三歳となつて右の作者としての資格が生じない。そこでこの作者を疑ふ説も生じてゐる。そしてその説に都合のよい事は目錄に「作主未詳歌」とある事である。それによれば問題は一切解消してしまふ事になる。考略解などはこれによつてゐる。しかし目錄に作主未詳歌と前(六七)にもあり、それによれば高安大島も抹殺する事になる。だが本文の左註に明記する作者名を削つて目錄による事は本末顛倒である。やはり今の場合も作者字合として考察を加ふべきであり、そしてその作者として字合を認める為には代匠記の説にかへるといふ事になる。たゞ問題は現存の懷風藻に「年五十四」とあるものの見えない事であるが、現に「年三十四」とあるものは誤である事右に述べた如くであるから、「三」を「五」の誤と断ずる事も認められない事ではない。

澤瀉博士はこうして契沖の五十四歳説によつて矛盾を解決しよう

とされているが、契沖説はそもその初めから契沖の思ひがえにもとづくもので、小島憲之博士などもはやくから疑われ、澤瀉博士自身もいわれているとおり、現存懷風藻には「五十四」に作るものは一本も存しないのである。そして澤瀉博士は「三十四」の「三」を「五」の誤と見ようとしているが、それよりも契沖が懷風藻の「三十四」を「五十四」に見誤つたとする方がいづそう自然であらう。いつたい契沖の見た懷風藻はどの本だつたのかというに、契沖は萬葉集三仙柘枝歌三首に、懷風藻から吉野の詩八首を引用している。その中の三首

藤原史 遊吉野二首

飛文山水地 命爵薛羅中

漆姫控鶴拳 口媛接莫通

煙光巖上翠 日影霽前紅

翻知玄圃近 对翫入松風

夏身夏色古 秋津秋氣新

昔者同口后 今之見吉賓

靈仙駕鶴去 星客乘槎遂

渚性口流水 素心閑靜仁

丹墀広成 吉野之作

高嶺嵯峨多奇勢 長河渺漫作廻流

口地超潭豈凡類 美稻逢仙月水口

これらの詩に欠字になつてゐる部分は、天和本でも欠字になつていて、まったく同じである。のみならず、返り点や送りがない(例文では省略)も、みずからの見識で正したもののはかはすべ

てかわりがない。この点から考えて、契沖の使用した懷風藻がほかならぬ天和本であつたことはもう疑いがない。すると、その天和本には三十四とこそあれ、五十四とはいひのだから、契沖説は問題にする必要がなくなつたのである。

こう考えてくると、三十四も五十四も共に誤で、冊四(四十四)がもつとも正しいことがわかる。これならば、公卿補任や尊卑分脉の記載とも一致する。天平九年に相ついで薨じた兄弟順についても

武智麻呂 五十八歳

房前 五十七歳

宇合 四十四歳

麻呂 四十三歳

となつて、その間に年齢の矛盾がない。

持統八(六九四) 生誕

慶雲三(七〇六) 十三歳

靈龜二(七一六) 二十三歳 遣唐副使(從五位下)

養老三(七一九) 二十六歳 常陸守(管安房上総下総)

神龜元(七二四) 三十一歳 持節大將軍(式部卿 正四位上)

〃 三(七二六) 三十三歳 知造難波宮事(從三位)

天平三(七三一) 三十八歳 畿内副惣管

〃 四(七三二) 三十九歳 西海道節度使

〃 六(七三四) 四十一歳 (正三位)

〃 九(七三七) 四十四歳 薨去

續日本紀によつて、大体の閏歴をまとめてみると、このように

なるが、懷風藻の中でみずから

自_三我弱冠從_三王事_一 風塵歲月曾不_レ休

とか、あるいは

学類_二東方朔_一 年餘_二朱買臣_一

などといつてゐるのも、みなこれによくあてはまる。ただ問題なのは、慶雲三年作歌当時の十三歳という年齢である。歌の内容からみて不適当であることはすでにいわれているとおりである。いかに早熟とはいへ、澤瀉博士のいわゆる難波の遊女などは、思ひもよらない年齢であらう。

この問題を解くのに、何よりも手がかりになるものは、すでに諸家も指摘するとおり、目録である。目録はいうまでもなく本文をみて、それにしたがつて作つたものであるが、それならば、いまの場合本文に

右一首式部卿藤原宇合

とあるのに、目録に

右一首作主末詳歌 式部卿藤原宇合

とあるのはおかしいではないか。同様の例はほかに卷一(六七)の歌にも見える。本文にはやはり明らかに

右一首高安大島

とあつて、目録には

右一首作主末詳歌 高安大島

と出ているのである。これらは武田祐吉博士の全註釈にも述べられてゐるように、目録がはじめて作られた時には、本文には作者名がなかつたからこそ、目録に「作主末詳歌」としたのではな

ろうか。もし最初から作者名があつたとしたら、目録でも作者名は「作主末詳歌」の前に記されているはずである。本文に作者名が出ていない場合、あとからそこへ何かの資料によつて作者名を書き加えることは、さほどの抵抗もなくできるであらう。一旦そこに作者名の書きこまれた本文ができあがると、目録にもそれがそのまま機械的に移される。こうしてついに、このような前後辻褃のあわないものができたのではなからうか。そう思つてみると、「式部卿藤原宇合」という書き方も異例なようである。「藤原朝臣」とか「宇合卿」とかありそうなところである。校本萬葉集によると、元暦校本と神田本（紀州本）にはいずれの場合も、目録には「作主末詳歌」とのみあつて作者名が出ていない。これは、まだ作者名が書き入れられなかつた時点の形を保存しているのであらう。また、西本願寺本など、本によつては「作主末詳歌」の下に小字で「式部卿藤原宇合イ」として、他本による校合を行っているものもある。これはすでに本文に書き入れられた後のすがたを示しているのだらう。

ところで、この二つの伝来はどちらに従つたらいいのだらうか。澤瀉博士は、本文を捨てて目録によるのは本末顛倒だといつて、あくまで原則論に立つて宇合説を主張しようとされているが、必ずしも一概にそうとばかりはいえないのではなからうか。宇合説も何かもとづくところがあつたに相違ないが、いまからそれを確認することは不可能である。とすれば、正否はともかくとして、本文にもとづくことの確実な目録こそかえつて本なのだから、これを信用して、宇合説をしりぞけ、眞淵その他の作主末詳説による

のが順当な処置というものであらう。橘守部の檜端手に

此時いまだ御幼年ならんとて、削りなどするはなかなかにわろし

といつているなどは、いわれない反論で、とるに足りないものである。

註(1) 古典文学大系懐風藻補註四六八頁「代匠記の五十四歳は

文獻の徴するところがなく、これは甚だ疑わしく、俄かに
は従えない」

(2) 漢書列伝「買臣笑曰、我年五十当富貴、今已四十餘矣」
「南冠勞楚奏」が西海道節度使（三十九歳）をいうのだ
らうから、この時宇合は少くとも四十をこえている。